

2024年度 事業計画

施設名 玉堤つどいの家

1 利用計画

事業種別：	生活介護	定員	13人	利用者数	13人
	年間開所日数	243日		延べ人数	2916人 (利用率 92%)

(1) 障害支援区分

区分6	11人	区分5	2人	区分4	0人	区分3以下	0人
計	13人						

(2) 障害の程度

		身体障害者手帳				計
		1級	2級	3~7級	なし	
愛 の 手 帳	1度	1人				1人
	2度	4人				4人
	3~4度		1人			1人
	なし	7人				7人
計		12人	1人	0人	0人	13人

(3) 年齢、性別

10代以下	0人	40代	4人	男性	7人
20代	2人	50代	2人	女性	6人
30代	3人	60代以上	2人	計	13人
計		13人			

※平均年齢：42.2歳（4月1日現在）

2 事業実施計画

(1) 活動・支援の内容

概要

- ・ 障害者総合支援法に基づき、常時介護を要する方に対して、主として日中において、排せつ及び食事等の介護、調理、洗濯及び掃除等の家事並びに生活等に関する相談及び助言その他の必要な日常生活上の支援、創作的活動又は生産活動の機会の提供その他の身体機能又は生活能力の向上のために必要な援助を行う。
- ・ 活動や行事の中で考え楽しみながら、外出や宿泊といった日常生活だけではなかなか体験できない機会を持ち、様々な場面で「自由に挑戦できる方法を一緒に考え、実践する」ことを目指していく。
- ・ 第三者評価を受審し、福祉サービスの適正化を図る。

(2) 地域交流

- ・ 「玉堤支え合いの会」（地元町会のボランティア）のご高齢メンバーのボランティア依頼は困難であるが、町会の新年会への参加をはじめ別の形での交流を引き続き模索する。
- ・ 地域古着回収活動に関する場所（正面駐車場）の提供やゴミ拾い活動への参加も検討する。
- ・ うめとぴあや区民ふれあいフェスタの販売会等、地域行事への参加や他事業所やボランティアとの交流等の機会を増やしていく。

(3) 家族、関係機関との連携等

- ・ 体調や高齢等で保護者会への参加が難しい保護者も多いため事業説明の面談を実施し、家族とのコミュニケーションをより丁寧に図っていく。
- ・ 相談支援関連の対面でのモニタリングやケアカンファレンスを実施しながら、関係機関との支援の連携を図っていく。また、利用者が短期入所・緊急入所・自立体験等実施する場合は、施設等との情報共有やフォローを入念に行う。

(4) ボランティアや実習生の受入れ

- ・ 介護等体験(教職員養成課程)、玉川聖学院、田園調布学園、セントメリー学園(年2回)等の打診があれば徐々に受入れていく。昨年度から実施している夏のボランティア体験の受入れ、駒澤大学ボランティアサークルとの交流は継続していく。
- ・ 光明学園の実習生は、感染対策を徹底して引き続き受入れていく。

(5) 危機管理

- ・ 「防災」に加えて、昨今急増している「防犯」に対する意識も高めていく。
- ・ 職員体制が変化するため、支援の方法を工夫しながら支援力の維持を検討していく。また、感染症や災害等に備え、BCP(事業継続計画)を見直し、法人全体と共有・連携していく。

(6) 職員研修の実施

- ・ 研修計画を策定し、職員一人ひとりのスキルアップに取り組んでいく。
- ・ 育成計画に沿って、新人職員が事故等なく丁寧な支援ができるよう育てる。
- ・ 利用者の高齢化に伴い、嚥下機能の低下や窒息の危険がより高まってきたため、緊急時の応急救護をしっかりと学んでいく。
- ・ 職員交換研修を可能な範囲で実施していく。

3 重点目標と取り組み

① 新規利用者増員に向けた取り組み

新規の利用希望者の受入れに向け、特別支援学校行事への参加、見学者をはじめ教諭や実習生の受入れ、区の担当者との情報共有や情報発信等、積極的に連携を図っていく。また、活動や行事に柔軟性を持ち、区や送迎業者と可能な範囲で送迎ルートの見直し、受入れ人数や方法の検討をしながら対応していく。

② 利用者の意向に沿った安定した生活基盤

利用者自身が将来の生活(グループホーム利用や一人暮らし、65歳以降の生活、成年後見人制度等)を身近で具体的に考える機会がより一層増えてきた。関係機関とのケア会議にできるだけ参加するとともに家族の体調不良等の緊急時について対応を図るなど、利用者が自身の意向に沿った生活が送れるよう積極的に支援していく。

③ 利用者の高齢化に伴う変化への対応

高齢化や新型コロナウイルス罹患の影響に伴い、体力や筋力低下が見受けられる。車椅子作製時のために世田谷区保健センターの専門相談課から理学療法士の派遣を新たに依頼する。昨年度同様、作業療法士・言語療法士等からのアドバイスも引き続き受けるとともに小さな体調変化を見逃さないよう入念に観察していく。また、体調調整や通院等での欠席者が増えてきており、通所と外出とのバランスなど無理のない生活リズムの確保も気にかけていく。